

隨筆集

大根足

木村美佐子

隨筆集

大根足

木村美佐子

著者 木村美佐子

昭和8年2月山口市生

山口女子短大家政学部卒業

現在日本女子大学通信教育学生

日本随筆家協会員

住所 所沢市向陽町2004-5

大根足

大根足のついで

昭和五十八年四月五日 発行

著者 木村美佐子

埼玉県所沢市向陽町二〇〇四一五
郵便番号三五九・電話〇四二九一三五―一三八二

制作 主婦の友出版 センタースタッフ

東京都千代田区神田駿河台一―六
郵便番号一〇一・電話〇三一―二九四―一一一一

印刷・製本 三和印刷株式会社

目次

大根足	5
誕生会	9
年賀状	14
マーちゃんの死	19
再会	23
嫁さん	28
電車の中	32
伝説と心中事件	36
飛行機まぐわ	40
父の形見	46
梅干し	50

蛇	54
鶴の番頭	58
古い手鏡	62
紫陽花	67
弁当泥棒	70
マルメロの思い出	75
母の形見	79
大内人形	83
酒蔵	87
クラス会	91
狂女トシ	95
忘れもの	99
主 ぬし の住む家	104
盆踊り	109

小さなストライキ	114
消えた地藏	120
老校の樹	124
兵隊宿舎	129
小さな家	134
座頭 ざとう	139
柿の木	143
幻の学校	147
品行が悪いケ	154
あとがき	159

大根足

世の若い女性方は、大根足をきらう者が多い。

確かに、洋服を着た時など、によきによきと出た二本の太い大根は、絵になる様ではな
い。私も、できることなら、すんなり伸びた格好いい足で、一度、街をかつ歩してみたいも
のだと思ったこともある。が、生来の太くて短い足ではどうにもならない。

しかし、いつの間にか、私の大根足とのつきあいも四十年を過ぎた。こうなると、この二
本の丸々とした大根の、ひょうきんで、愛きょうのあるところに、妙にいとおしさを覚える
のである。

ことしの正月に、友達から一枚の写真が送られてきた。見れば中年の、体型のくずれた男
女が二十人ばかり並んでいる。二十三年前の高校時代の同級生だったのである。一人ひとり
の顔を見ているうちに、私の大根足を最初に指摘した人がいるのに気がついた。

忘れもしない高校三年の春であった。

私たちの年代の者は、戦後の教育制度の改革の過渡期を過ごしてきたのである。高校三年になって急に男女共学制が実施された。小学校から別学に慣れていた私にとって、年ごろになってからの共学は、刺戟の強いものであった。異性を意識するのは当然である。また、でさるだけ格好いいところを見せたいのが人情でもある。

そのようなある日、私は浅野君という同級生の一人からこう言われたのである。

「藤田（私の旧姓）さんの足は太いねエ。小野さんの足が太いと思うちゃったら、藤田さんの方がまだ太いねエ」

私はそれを聞いた瞬間目の前が真っ暗になったような気がした。だが、彼の屈託のない笑顔は、冷やかしゃ、意地悪で言ったのではないことは明らかだ。しかし、娘心にとっては、あまりにも無神経な言葉であった。そのころの私は大根足を隠すために長めのスカートをはいていたのである。そして、特に異性の前では、後姿を見せないように心を配っていたのである。その日の日記には、次の四カ条を実行すること、と書いてある。

一、食事中は正座をしないこと、

二、家の中ではつま先で歩くこと、

三、二階（私の部屋）へ上がる時は、つま先で走って上がること、

四、寝る前には必ず兄のゲートルを巻く。

それは早速実行に移された。まず食事の時、そつと飯台のかげで足をくずした。すると祖母が、いちはやく気づいてしまった。たちまち私は、行儀の悪さをたしなめられた。第一条は、とうてい実行出来そうにないので止めた。二・三・四条は、その後何カ月続いたか定かでない。相当長く続いたのは確かである。——が、依然として私の足の太さは変わらなかった。

あの時の私のショックと、それに続く苦行のことを浅野君に知らせたいと思ってペンをとった。しばらくすると、きちょうめんな横書き文字の手紙が彼から届いた。

「——当時、私は体が弱くて、体重三十五キロしかなく、半年間は病院通いでした。ですから私の足は、ズボンに隠れて外からは見えませんが、細くて骨と皮でした。藤田さんや小野さんの豊かな足を見るたびに、どんなにうらやましく思ったかわかりません。大学に入ってから、陸上競技とスキーで鍛えました。おかげで、いまでは体も人並みになり、スキー連盟の理事をして、後輩の指導もしています。この二十年間、小学校の教員をしてきて、何度

も壁につき当たり、辞表を懐にしのばせて登校したこともあります。しかし、現在は徳佐（阿東町）の分校で、“二十四の瞳”さながらに、十二人の生徒相手に充実した毎日を送っています——」

二十三年経って、初めて彼の言った真意がわかった。と同時に、若いころはなんとくだらないことに怒ったり、悲しんだりしたのだろうか、と思われてくる。そして、そんなことを思う私は、また、人生の半分以上を過去にしまったものだ——と感慨にふけるのである。

誕生会

遠出をしたついでに、その近くに住む友人を訪ねた。

玄関に入ると、子供の靴が所狭しと並んでいる。奥の方から賑やかな笑い声も聞こえてきた。間もなく友人が顔を出したが、何か興奮のほとぼりがさめきらぬ表情であった。私は尋ねてみた。

「賑やかな様子だけど、何かあるのかしら」

「ええ、息子の誕生会なのよ。親は準備で大変だったのよ」

紅潮した彼女の頬に喜びは隠せなかった。こうなると、誕生会も、あながち子供のためとばかりは言えないようだ。そんな友の横顔を微笑ましく眺めていると、何年か前のある誕生会を思い出した。

誕生会
終戦後二、三年たった頃であった。ふとしたことから知り合ったK少年から誕生会の招待状を受け取った。

——四月一日。エイプリルフールではありません。真正正銘の僕の誕生日です。是非お出で下さい。お待ちしております。

K——

私はそのハガキを手にして、喜びでいっぱいになった。当時は、誕生会をするなどという習慣はその地方ではなかった。ましてや、女学生の私が初めて知り合った中学生（当時は男女別学であって、男の中学生をこう呼んだ）から招待を受けたのであった。

K少年は生真面目を絵にしたような少年だった。私達は月に一度くらい会って、蔵書を交換して読後感を話し合った。二人とも異性の友達に慣れていないので、いま考えると、おかしいほどぎこちない会話を交したものだ。

招待されたのはよいが、誕生会に行くにはプレゼントが要ることを思い、思春期の私の悩みがそこから始まったのである。

何を持って行くべきか……。いろいろ考えた末に、私は映画の場面を思い出した。花束が浮かんた。男性が花束を手渡して頬にキスをしているシーンである。思い出しただけで何となく気恥ずかしくて赤くなりながらも、私は花束を持って行くことに決めた。

当日が来た。農村には花屋などというハイカラな店はなかった。私は隣近所をまわって庭

に咲く花を貰い集めてきた。勿論、男友達の誕生会のプレゼントであるとは言えない。仏壇に供えるためとか、机上に飾るためくらいにしか言えなかった。

集めた花を包み紙にくるみ、赤いリボンをかけてみると、誕生日のプレゼントらしき装いになった。しかし、いざ約束の時間となると、どうしてもその花束を持って行く気になれなかった。

私は思春期の猛烈な羞恥心に襲われたのである。花束を男性に贈ることは「愛の表現」ではないだろうか。当時は「愛」とか「恋」とか口に出すだけで気恥ずかしさを伴ったものである。私は自分で自分を決めかねて、じっと時間の過ぎるのを待った。

昼近くなって、当のK少年が迎えに来た。祖母に促されて、K少年の帰った後から家を出た。自転車の荷台に花束を乗せて――。

神社の角を曲がると、大きい茅葺きの彼の家が見えてきた。近づく、庭一面の花畑である。私は心臓の鼓動が高鳴るのを覚えた。花畑には赤や黄色の花々がこれみよがしに咲き誇っている。私は自転車から降りると、花束の紙包みをほどいた。みすばらしい一束の花を畑の上に一まとめにさした。そして玄関に向かった。家の中には数人の男女がいるらしい気配

がした。引き返したい気持を押さえて中へ入って行った。

「まあ、よく来て下さったわねエ。ずっと待ってたんですよ」

明るい笑顔でK少年の母親が迎えて下さり、私は安堵した。K少年の友達と、彼らの友達数人が集まっていて、ランプに興じている最中だった。奥の部屋にプレゼントの包みらしき箱が積まれているような気がして、私は気が気ではなかった。プレゼントを渡さない引け目と、初めてK少年の家で過ごす緊張感とでその誕生会は終わった。

帰るとすぐに私は祖母に言った。

「誕生会には贈り物を持って行くのよ。私だけ何もあげんで恥ずかしかったんよ」
すると祖母は言った。

「そんなら、店にある酒粕を持って行ったらええが」

祖母は新聞紙にくるんで風呂敷に包んだ酒粕を持ってきて、私に手渡した。私の家は造り酒屋であったので、酒粕は店の売り物である。私は祖母のあまりにも現実的な考え方に反発して断わった。が、さりとて名案もなくしかたなく持つて行くことにした。

私はK少年の家にもう一度行くと、彼の母親にそれを手渡した。奥からK少年が出てき

た。私は恥ずかしさでその場にいたたまれず、一目散に表へとび出した。自転車に乗ってからも、私の顔は火のように火照っていた。

——誕生日のプレゼントが酒粕なんて……。

年 賀 状

松の内も過ぎて、一枚の年賀状が戻ってきた。宛先不明と書かれている。宛名はK君である。彼とは高校三年のとき同級生だった。

昔から付き合いの少ない少年だった。彼には仲のよい友達が二人いた。一人は卒業後まもなく病死した。他の一人は広島に住んでいるらしいが、卒業してからは交際も絶えたようである。すると、卒業後、K君と親しく話したことがあるのは、私だけであつたと言えるだろう。

あれは、真夏の昼下がりであつた。その当時、家を離れて学校に勤めていた私は、長い休みがある度に帰省していた。そんなある日、私は真夏の暑さをもてあまして、うたたねときめこんだ。ふと気がつくと、玄関の方で聞きなれない男の声がしていた。やがて祖母が私のところへ来て、耳もとでささやいた。

「Kさんとか言う人がおいでたで。はよ起きんかいのう」